

令和 2 年 6 月 23 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04749

研究課題名(和文) 美術の知識特性に即した能動的な学習を創出するための教員養成学部学習モデルの構築

研究課題名(英文) Development of a Study Model for Teacher Training Schools to Create Active Learning that Adapts to the Knowledge Characteristics of Art

研究代表者

相田 隆司 (AIDA, Takashi)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：20302903

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：大学生に、(1)熟練した教師が教育活動を通して実現したいと考えている願いや価値観と、その単元や授業運営に深い関連があることについて気づかせることを通じて、より深い授業理解をもたらす可能性について提示できた。そして、(2)コミュニケーションと美術を主題とする単元と研究授業についての考察を通して、より汎用性のある単元モデル成立の要件を確認した。単元を作ったベテラン教員の意識として、1)学習主題への深い理解や解釈、2)学習・活動・探究方法の選択への意識、3)授業構造や学習環境への意識、という3つの意識が指摘できると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教員養成学部生が能動的な学習創出の能力を高めるためには、(1)まずその授業理解を深めさせることが重要である。図画工作・美術科の単元づくりをめぐる(2)“日常的な事象が学習主題化されるプロセス”を大学生に(追)体験させながら、ベテラン教員の意識している事項の存在と意味に気づかせていくことが有力な方略として考えられる。

研究成果の概要(英文)：We were able to present the possibility of bringing about a deeper understanding of the lesson by making university students realize (1) The wish and sense of values that a skilled teacher wants to realize through educational activities, and the fact that they are deeply related to the unit and lesson management. (2) Through consideration of units and research classes on the subjects of communication and art, we confirmed the requirements for establishing a more versatile unit model. As for the consciousness of the veteran teachers who created the unit, it was thought that three consciousness could be pointed out: 1) Deep understanding and interpretation of the subject of learning, 2) Consciousness of the selection of learning, activity and inquiry method, and 3) Consciousness of the class structure and learning environment.

研究分野：美術科教育

キーワード：教員養成 美術科 授業理解 ベテラン教員

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当時の背景

今日、児童生徒に向けた能動的な学習の提供が必要とされており、こうした状況に対し教員養成大学は大学生に能動的な学習を創出しマネジメントできる力を育成しなければならない。さらに、図画工作・美術科を担う教員はその知識特性に配慮した学習機会の創出が求められる。本研究はこうした課題に取り組み、美術の知識特性に即した能動的な学習を創出するための学習モデルの構築を行おうとするものである。研究の必要性については以下の(1)(2)があげられる。

#### (1)能動的な学習(アクティブ・ラーニング)の必要性

今後は、社会に開かれた教育課程の実現が目指され、『学び』の本質として重要となる『主体的・対話的で深い学び』の実現を目指した『アクティブ・ラーニング』の視点から、授業改善が必要である(中央教育審議会審議のまとめのポイント 2016.9.21)とされた。これらは「生きる力」、「コンピテンシー」、「汎用的能力(OECD)」等といった21世紀型と呼ばれる学力観に見られる、知識・技能、思考力・判断力・表現力等の活用力、さらに非認知的な能力も含む人間性等も重要であると捉える学力観であり、本研究はこうした学力観を基盤に構想される能動的な学習方略に関する一研究である。

#### (2)芸術科目における知識特性に応じた学習の必要性

能動的な学習に関して、図画工作・美術科に携わる教師は、「芸術科目の知識特性」(教育課程部会芸術ワーキンググループ資料 2016.5.26)にあるアクティブで更新される知識を重要と捉えた学習を準備する必要がある。本研究は上記の能動的学習と芸術科目の知識特性の必要性を重要ととらえ、教員養成に関する事項につき考察しようとするものである。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は「美術の知識特性に即した能動的な学習を創出するための教員養成学部学習モデルの構築」である。これから、より深い学びとされる能動的な学習の必要性に応じ、教員養成大学はそれを創造的に作り出す力を備えた人を育成していかなければならない。また、図画工作科・美術科を担当することになる学生にはその「見方・考え方」に配慮した学習を創出する力が必要となる。本研究はこうした課題に取り組むため、本質的な問いを活用した美術の知識特性に留意した能動的な学習(単元)モデルを探求することとした。

### 3. 研究の方法

#### (1)熟練した教員への注目

本研究では、より深い学びとされる学習を創出するための学習(単元)モデルの構築をめざす上で、「能動的な学び」を子供たちの「概念的理解」とされる理解次元を可能にしていく学習ととらえ、それを目指すための学生の授業理解をめぐって、熟練した教員の「本当に教えたこと」と単元・授業の関係に注目させていくことが考えられた。筆者もまた経験的に、大学における模擬授業や授業づくり演習の実践的課題として、児童生徒に学習の主題を捉えさせるための支援・手立てから授業を見る、といったスタンスにどう気づかせることができるか、それを理解させることが課題であると考えてきた。この児童生徒につかませたいことや理解させたいことを児童生徒の必然性に沿って授業構造に位置づけようと創意工夫することは、優れた授業を成立させる要件の一つとして教師達にすでに長らく共有されている事柄である。しかし授業作り初学者にとって、この子どもに沿ったプロセスをすぐにイメージして授業をつくりだすことはそれほど簡単なことではない。石井英真は、教師に「実践的指導力」が求められ続ける中でも知的営為の本質に触れる授業の必要性を述べ、「学問する教師」による「教科する」授業が目指される必要があるとしている。<sup>1)</sup>そこで、学問する教師である専門性を有する現職教員の単元・授業を大学生が経験することを通して、熟練した教員の問いと題材の関係性に気づかせることにより、学生の授業理解を深めることが可能ではないかと考えられた。学生の授業理解の視点が深まることのないまま、単元次元の構造や問いを理解することが必要となる本研究の目標に近づいていくことは難しいと考えられたからである。熟練した教員が単元や授業を通して教えたことをどのように問い、課題を設定しているのか、そして教えたことが題材の内容や方法のどこに埋め込まれているのか等を授業経験として理解することで、「深い学び」をつくりだすために必要なより深い次元の授業理解の視点を獲得させることができるのではないかと考えられた。なお、本研究でいう熟練した教員とは、川上綾子らの研究にならぬ、経験を積んだ教師であり、深い価値観と子どもと教科・教職に関する豊かな知識、授業技術等を併せ持つ現職教員を指す。<sup>2)</sup>

#### (2)美術教育における先行研究

新井哲夫・金井則夫は、図工・美術科教育に求められる教師の専門的力量についての詳細な先行研究調査を通して、9つの構成要素を提示している。新井・金井は、小山悦司らの『教授的力量の分類項目』における教授的力量と人格的力量といった要素を提示しつつ小山の言葉を借りるとしながら、「人格的側面の上に技術的側面を総合し、『自己の人格的特性を生かした教授技術を創造』することができるのは、自らの専門的力量の向上を願う教師本人を置いて他にはいない」<sup>3)</sup>と述べる。そして、ゆえに教師教育に関わる人間は、そうした環境や条件を整えること、必要

な情報を提供するなど側面からサポートすることに専心すべきであると語っている。本研究の目標は、学生にここで述べられている人格的特性の上に技術的側面を統合している熟練教員のありように気づかせることにあるといえる。また隅敦は、若手教師の育成を急務と捉え、若手教師の授業ビデオ記録と聞き取り調査・分析を通して実態把握を行っている。隅は「1年次から求められる実技教科の授業力を有する若手教員を養成するための要件」における聞き取り調査の結果として5点を挙げながら、そのうちのひとつである「熟達教員による実技教科の示範授業の実施」については、初任者研修段階の現職教員には「機会を得ることはかなり難しいと思われる」と述べ、現実的対応としてビデオ撮影した熟達教員の授業の視聴をあげている。<sup>4)</sup>本研究は学部生の教育に関するものであり、熟練教員の招聘は大学附属学校との人的交流等を中心に可能であると判断された。

#### 4. 研究の成果

##### (1) 本研究の研究協力者とのワーキングを通して

本研究では、まず研究協力者のベテラン教員に集まってもらって、彼らの「ほんとうに教えたこと」<sup>5)</sup>を聞いた。先述の通り本研究の問いは、より深い学びを作り出すことのできる学部教員養成の授業の在り方をめぐるものである。この問いを、では深い学びを実現しているベテランはどのように単元・授業を作り出しているのか?という問いに取りかえることにしたのである。集まってもらったベテラン達の「ほんとうに教えたこと」は、「自信を持ってつくる ちがうところはよいところ」、「学び問い続ける力 生徒が築く」、「どんな感じ? どうやって表す?」とされ、それぞれ異なるが、それらをもっとも体現していると本人が考える題材を紹介してもらい、確認してみると、子供たちに新しい見方を考えさせること、教科の見方・考え方そのものが学習主題に色濃く反映されていることが確認できた(2017年度)。

##### (2) 大学での熟達した教員の授業を通して

次に、彼らを大学に招いて大学2年対象授業で実際に小・中学生を対象に実施している授業と同一の授業を実施し、学生の学びと振り返りを考察した(2018年度)。当該年度の授業を受講した学生のベテラン教師の単元・授業から学んだこととして抽出されたのは、以下 ~ の6項目であった。子どもにとって「意外性」があること、それとなく「スモールステップ」をつくっていること 子どもの「表現の幅」を認めていること、子どもが活動に「必然性」を感じる工夫があること、「身近」であること、「教科の特性」造形的にものごとを捉える、ということ踏まえてそれが発揮できるようになっていること、の6項目である。<sup>6)</sup>この6項目を学生の気づき=授業理解の深まりの現れと捉え単元作りを生かしていくこととした。半期授業の開始時と終了時の学生の感想記述を比較すると、関心事が教師の指導技術的なことから、授業を価値観(教えたことや願い)を通して見ること、子どもの学びを保障する授業構造への気づき等へ変化している様を見ることができたと考えられた。

##### (3) 質問紙調査を実施して

同時に、現職教員がどのような願い(価値観)を持っているのかを調べるため、東京都の中学校美術科を担当する先生方を対象に質問紙調査を実施した。質問項目は「中学生が美術を学ぶ価値について」、「身に付けさせたい力と関連題材」、「深い学び実現のために作ってみたい単元」の3点(期間:2018年8月2日~8月24日(消印有効) 対象:東京都公立中学校 美術科担当者306校、回収:72件[抽出・郵送法 回収率24%])。3つめの質問項目、深い学び実現のために作ってみたい題材について、この調査における中学校美術科教員の回答は上位から、コミュニケーションと美術(17.7%)、感性と美術、美術の社会的機能(14.2%)、感覚・想像力と美術(9.9%)、個性と美術(8.5%)となった(複数回答 延べ141件)。<sup>7)</sup>

そこで、本研究ではコミュニケーションを主題とする題材をモチーフにして、より深い学びを実現していくための大学教育の場で経験させる題材(考察や演習の対象とする題材)を考えていくこととした。そこで再度ベテラン教員とのワーキングを実施し、コミュニケーションを主題とする小中学校における題材考案(創出、アレンジ)を行った。

ベテランと考案したコミュニケーションを主題とする題材のうち、小学校題材1件、中学校題材1件を研究授業として小・中学生を対象に実施し、授業前後で実施した児童・生徒への質問紙調査を検討した(2019年度)。質問項目は東京学芸大学次世代教育研究推進機構が児童生徒に実施した質問紙調査の項目<sup>8)</sup>のうち本研究に関連する質問項目9件に依拠した。そのうちコミュニケーションに関連すると考えられる「伝える力」に関する質問項目は次の(1)(2)(3)の3つである。「(1)授業や話し合いで、自分が考えたことや意見などをわかりやすく伝えるようにくふうすることができる。(2)授業や話し合いで、自分が考えたことや意見を伝えるときに、「なぜなら・・・」などの理由といっしょに説明することができる。(3)授業や話し合いで、ほかの人の考えや意見をきちんと聞いて、わからないところは質問をすることができる。」

質問紙調査の結果、中学校題材における授業前調査(回答度数99)と事後調査(回答度数91)の「伝える力」に関する回答結果に有意差が認められた( $p < 0.01$ )(質問紙調査実施:2019年9月6日、対象:A中学校 第2学年33名)。小学校題材では回答結果に優位差が認められなかつ

た。

#### (4) 総括

本研究の成果は、上で述べたとおり、現職教師が教育活動を通して実現したいと考えている願いや価値観と彼らの単元や授業(運営)に深い関連があることについて学生に気づかせることを通して、より深い次元の「授業理解」をもたらす可能性について提示できたことである。そしてコミュニケーションと美術を主題とする単元と研究授業についての考察を通して、より汎用性のある単元モデル成立の要件を確認した。単元と作ったベテラン教員の意識として、学習主題への深い理解や解釈、学習・活動・探究方法の選択への意識、授業全体構造や学習環境への意識、という3つの意識が指摘できると考えられた。教員養成学部生に授業理解を深めさせるための単元づくりをめぐるには、今回とりあげたコミュニケーションのような“日常的な事象が学習主題化されるプロセス”を(追)体験させながら、ベテラン教員の意識している事項の存在と意味に気づかせていくことが有力な方略として考えられる。

#### <引用文献>

- 1) 石井英真著「第4部 教師教育の構造と実践 第1章 養成教育」『教師教育研究ハンドブック』日本教師教育学会編 学文社 2017 pp.174-177
- 2) 川上綾子, 木下光二, 森康彦, 益子典文著「授業の熟達化における『視点』の役割」鳴門教育大学紀要第32巻 2017年 p.178
- 3) 新井哲夫・金井則夫「図画工作・美術科教育に求められる専門的力量形成に関する検討(1)-図画工作・美術科教育に求められる専門的力量とは?-」『美術教育学第34号』(2013)
- 4) 隅 敦「若手教員の図画工作科授業力の向上を支えるために-実技教科としての位置づけを踏まえて-」『美術教育学第39号』(2018)
- 5) 小田勝己編著「学校発カリキュラム 日本版「エッセンシャル・クエスション」の構築」東信堂 2007年
- 6) 相田隆司、立川泰史、西村德行、大根田友萌、大櫃重剛、濱脇みどり「熟練教員の題材をめぐる大学生の実践的理解の様相に関する一考察」日本教材学会 教材研究 第30巻 pp.7-18 (2019)
- 7) 相田隆司、立川泰史、大櫃重剛、濱脇みどり、大根田友萌、西村德行「大学生が授業理解を深めるための図画工作科・美術科の単元づくりに関する一考察- 中学校美術科教員を対象とする質問紙調査結果をきっかけとして -」東京学芸大学紀要芸術・スポーツ科学系第71集 pp.56-67 (2019)
- 8) 文部科学省機能強化経費「日本における次世代対応型教育モデルの研究開発」プロジェクト報告書 Vol.4 中学校授業分析版「OECDとの共同による次世代対応型指導モデルの研究開発」プロジェクト 平成28年度研究活動報告書 東京学芸大学次世代教育研究推進機構 2018年

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 相田隆司 立川泰史 西村德行 大根田友萌 大櫃重剛 濱脇みどり	4. 巻 30
2. 論文標題 熟練教員の題材をめぐる大学生の実践的理解の様相に関する一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教材学研究	6. 最初と最後の頁 7-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 相田隆司、立川泰史、大櫃重剛、濱脇みどり、大根田友萌、西村德行	4. 巻 第71集
2. 論文標題 大学生が授業理解を深めるための図画工作科・美術科の単元づくりに関する一考察- 中学校美術科教員を対象とする質問紙調査結果をきっかけとして-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要芸術・スポーツ科学系	6. 最初と最後の頁 56-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 相田隆司
2. 発表標題 図画工作科・美術科の授業・単元づくりをめぐる探究 - ベテラン教員の授業を体験した学生の姿から -
3. 学会等名 日本教材学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 相田隆司 大根田友萌 大櫃重剛
2. 発表標題 ベテラン教員の題材をめぐる大学生の実践的理解の様相に関する考察
3. 学会等名 美術科教育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	大櫃 重剛  (OBITSU Shigetaka)		
研究協力者	大根田 友萌  (OHNEDA Tomoe)		
研究協力者	濱脇 みどり  (HAMAWAKI Midori)		
連携研究者	立川 泰史  (TACHIKAWA Yasushi)  (10735418)	東京家政学院大学・現代生活学部・准教授   (32648)	
連携研究者	西村 德行  (NISHIMURA Tokuyuki)  (50747764)	東京学芸大学・教育学部・准教授   (12604)	